

KODAK
LICENSED PRODUCT

M

Y

C

KODAK Gray Scale



鷹世如装考

冬

伊
972
4

76
972
4



佛
992
卷
4



歴世女装考卷之四目錄・前編之部

- 一 勝山といふ髪の結風・高尾又死の討論
- 二 丸鬘鬘
- 三 片外といふ結風の權輿
- 四 俗いの推葺ながの始原
- 五 髪ふたがといふ名義
- 六 髪ふたがといふ起立
- 七 髪ふたがといふ物
- 八 髪ふたがの事
- 九 髪ふたがのといふ物
- 十 髪ふたが・文金といふ島田鬘の一風
- 十一 今の髪は形状ハ古風ハかへり証

女装考
卷四



目錄

- ⑫ かむおむまぶ・櫛巻とゞ髪くしまき とゞかみの風
- ⑬ 貞享年中女の頭小飾まことけうちゆうすけし物十六品ものじゅうろくひん
- ⑭ 十八九の乙女竹馬おとこめたけうま小のりて遊あそぶび一古風こふう
- ⑮ 婦人貞操めいじんけいそうの爲小髪こかみを截き一故事こと
- ⑯ 水油みづあぶらの古名ふるな・びんかんびんかんかつら
- ⑰ びんかん油びんかんあぶらの始原はじめ
- ⑱ びんかん油びんかんあぶらはいつりかた
- ⑲ 髪小伽羅かみせうがらをとめる
- ⑳ 元結もとむす・丈七元結ぢやちやちやんの名義なみやい・を採りてゆい
- ㉑ 御齒黒ごはくろの始原はじめ

通計附録共廿七條

歴世女装考卷之四

江戸

岩瀬百樹 編撰

① 勝山とゞ髪かつやま とゞかみの結風むすかぜ

勝山とゞ髪かつやま とゞかみの髻むすこ今も其名そのなの残りのこりはほど髻むすこの状しやうハ當世あうぜあり古ふるは形状けいじやうハ圓まると
いへしてある一此髻このむすこハ二百年前ふたひゃくねんぜん兼應かねえいの間江都まがらも名高なかつたり湯女勝山ゆめかつやまが結むすこたる
まが髻也此勝山湯女まがむすこ凡ことごとく呂国りこく禁かへんありその北廓きたがくわくは介まがかの高尾たかおと時ときを同じおなておのち名
まがまあく間ま也万治三年ばんぢさんねん江戸板えどいた高屏風たかびやうぶ管物語くだものことば上かみ北廓きたがくわくの茶屋ちややは老婆らふた遊客ゆやくも妓かどもと
あ指さて名なををゆゆる也なりはさへ巴ひらひの内うちゆいんゆいんをけりたるはさへゆいんゆいんのやどをさちをさるは此この方かたハ
かたせんのせうさんせうさんと京田舎きやうぢん名高なかつたき勝山かつやまはまこととせしむるもさ畧りやくみどりある
あ後あとをばとがさうさうよゆいゆいありありとあり此このかた山やまが結風むすかぜとありつるはさへゆいんゆいんにて万治三
な年ねんより廿五年にじゅうごねんのち天和三年てんわさんねん江戸板えどいた浮世物うきもの真似まね口寫くちが横本よこほん花はなの露屋つゆや喜左衛門きざゑもんが
あ芝守田川しばもりたがわ店みせハ伽羅がらの油あぶらゆいゆいゆいの詞ことばハ「まづ女中にようぢゆうのたて風かぜハ兵庫ひやうご・つのみる
あ町まちとあり

あつひいあまきか山とあり又勝山が廓は在り万治二年より廿四年のち天和二年
大坂西鶴作「代男」卷一「丹お風と申ハ中畧凡呂屋あり」附勝山との湯女
まぐさて情もふく形やうあり後ありゆめはたはあて世の人をたて流
あまきよりとめゆりて北廓へ出世して不思議の山方までゆりたあめ
女よとる又享保五年庄司留勝甚左衛門子孫が作の本「洞房語園」同名の板本あり是ハ別本あり「卷三」兼應
明暦の比新町山本芳順家小勝山といふ太夫あり元ハ神田丹後殿お紀伊
糸呂市郎兵衛方居り凡呂屋女あり其頃凡呂屋御口禁あり
ゆめ勝山も親里へかへり又芳順方へはとめたり髪は白き元結りく片曲の
だて結び勝山風とて今よまきさう揚屋は多左清門あり初ていづる家々の名をうごも
勝山とんと両側は群り居り居りけふためこれ道中る事ともハ文字をのみて通り
粧ひ番量地なて又並あへんとぞ全盛其比廓第一とまきとなり手跡も女
あめづりき終書あり勝山がまの哥よいのせ山あが海川のうす氷さけけぞ

いし袖いぬまける下畧「此勝山いせよまきなる万治高尾が紅葉と二月の花を
あうそのし事いあ引る万治三年板の管物語は詳ありおの因ありてあは高尾
が實傳を奉て船中の白及ふ死たりといふ妄説を折衷
按ハ明暦三年の大火ハ元葭原類焼し七地を千足は許され草莽を因り万治
二年の春新廓全く成就あり青樓鱗次とて軒を並ぶ此時ふ當り三浦屋は二
代目の高尾あり是を万治高尾とて高尾十一代中の名妓とて其出生ハ下野国塩
原の庄中塩釜村同名市下三村あり農夫長助が女あり此家今高尾十一代のうち小独り此高尾
のみ世小推称せらるハ一貴顯の事小出巷傳小曰高尾或貴顯小寵せんと
身を賤れたまとも節を情人小守りて随ぶ終小ハ船中の白及ふ死せりと
のち因一犬虚小吼て萬犬實をばへる妄説あり然とせよも衆口金を
鑠を以て具眼の徒も雷同ハ實跡とて既ハ享和二年の塩原の里人高尾が
出生の地とて其所は建たる鴻儒某の碑文ハ「遂遇害於三又水」と妄説を

碑の残して千古の傳ふるに至る是高尾の實傳の書あるゆゑ巷説はこれ
なるる一亡兄醒齋翁常巷傳の妄説折衷せざるやとて高尾考の企むし
ゆゑ彼等事のえたる物数本参考せしむるに皆率強傳會の統のみを以て取
事さすふか秘記のるを中りるまへに或書に深草の元政上人俗たりし時高尾
が情人ありし船中の又死をききて出家かたりとあり上人が身延記行を著しし
論より上人の慶安元年廿六の出家の時高尾八歳也とあり農夫長助が家
おわつらん上人の明暦元年三十三歳に深草瑞光寺の因祖とあり主以寛文
八年四十六の寂し玉高尾が事の傳會のみか此のふて心ある人の書さるめ
まのいもあつた口碑の玉浪を折衷せし高尾の實傳を得ざるゆゑ未成の
高尾考高尾十一代の実傳むらぐ箱あり然るふ天保三年仲秋敝書一本を得る
高屏風管物語と題し全三卷万治三年江戸板序文あり作者ハ頗る學あり
て明暦の旧廓万治の新廓も遊び友あり人の高尾が情人ありて作者より人

げある変文中みえたり一都をて當時の福故のまのみま板摺雜紀より
たう部の發端は「常物て硯の海のわん竹万治三年の春のそあよりせ
くとの入し」とありて全部の終りは「地のひあつゆのくせやうておの目
もあひぬまふ硯よ對して心ようけりゆくあつゆの事ごの世とらとあき書付
しをある事もつまるる實傳ありらう中のみあつてあれども高屏風ありの折
やはまをせされ」と筆をこめたる書存の心も炳然あり。さて下北卷の此
作者の友あり秋の康といふ人按此名ハ支那の高尾のわん竹も高尾病死の工を
たうどの紅糸ありてさうして秋の康があげくあんも「せむせれゆあうた
ゆよこせとわのひやうまをせむのちみはるまんや高徳寺とのあまうどてうおけん
これ香をなき花をてはばうけりしてとむるをまをあんいと哀れまをいよ
一巻の工をて紙にりて初めはあまをかんかうけんあける其工をいよ」とありて長
まことありまといふ「あつて万治二年のうけ秋の本つこより紅糸のちもあま

いふるうらまはせしあはれとてあつらひせしまふらやまらうの影をれば茶屋のて
あつらひせしあはれとてあつらひせしまふらやまらうのてあつらひせしあはれとて
のてあつらひせしあはれとてあつらひせしまふらやまらうのてあつらひせしあはれとて
十二月
さてあつらひせしあはれとてあつらひせしまふらやまらうのてあつらひせしあはれとて
三谷高徳寺
轉善妙身
己亥極月十日花將敬白とあり
極月十日高尾が
七の待夜あり
此文の委実あるを証しとて
二又舟中み害せしとて古来の妄説を折衷べしさて又初之三谷の高
徳寺は垣一重隔る月光山春慶院
浄土宗
今限ふたふ墓あり
門内とてあつらひせしあはれとて
みづげの四方塔を遊女を身あつらひせしあはれとてあつらひせしあはれとて
屋が菩提樹下を推すありふたふをあつらひせしあはれとてあつらひせしあはれとて
考は企ありし頃
今より四十余
春慶院の檀家あり曰林有
浅草田町あり
とてあつらひせしあはれとてあつらひせしあはれとて
醒翁地のまを伴ひて春慶院より布施をじてかの墓の由縁を尋ねけり
住職いひけるやうむり此寺は常念仏ありとて寺のちてあつらひせしあはれとてあつらひせしあはれとて

あつらひせしあはれとてあつらひせしまふらやまらうのてあつらひせしあはれとて
今も三浦長屋とてあつらひせしあはれとてあつらひせしあはれとて
病ありあり比り
身のちの朝を夕を枕しわらわら物のかの寺へかへし玉とれらの遺言ありてあつらひ
葬りたるより寺説小傳へいたるを持し物をもあつらひせしあはれとてあつらひせしあはれとて
残りしきだのけつ代よりて墓所地四角大雨の時いひて墓の水のこゆるを
合せ墓をまのけ玉をいしける附たるものもそのけつたるあつらひ
石指あつらひせしあはれとてあつらひせしまふらやまらうのてあつらひせしあはれとて
醒翁のまを伴ひて評論せしとて検定を命じ見ゆありてあつらひせしあはれとてあつらひせしあはれとて
得る件の管物倍の下の巻ありてあつらひせしあはれとてあつらひせしあはれとて
たぐり倍ありてあつらひせしあはれとてあつらひせしまふらやまらうのてあつらひせしあはれとて
みまもぬもいひてあつらひせしあはれとてあつらひせしまふらやまらうのてあつらひせしあはれとて
いふことせしあはれとてあつらひせしまふらやまらうのてあつらひせしあはれとて
せしあはれとてあつらひせしまふらやまらうのてあつらひせしあはれとてあつらひせしあはれとて
五三

さて髪の一風を地なる勝山に俠氣ありしものとて異名を奴かりしとて世よ名の
高よりし車緒常小教見ま其の中み秘まされ **昨日廿日** 字本序元文三年秋
「万治のころ奴勝山とて髪の一風中伊達の名をそがぬのひの外親も孝心も
流まよあり比母そととて順禮のまが成ありと揚屋の二階をかり切札
あて七日潔斎しめづりける古老の法よまきぬ今の九曲をかりしとて
初まあつ九曲いかんまよよりゆいそあり」又 **川岡雜談** 字本明和九
二丁目山本勘右門抱子勝山との遊女あり貞享以前の比ありし此女のやた川
竹の身あれども敷鴉のなま心あり又佛法を信し母常迅速の浮世を観し其殊勝
ある女あり髪を結せし一流をあて世多き見を学びかつ山と名付く」とあり順礼
を学びて母の菩提を弔しも仏法を信しなるゆゑあり

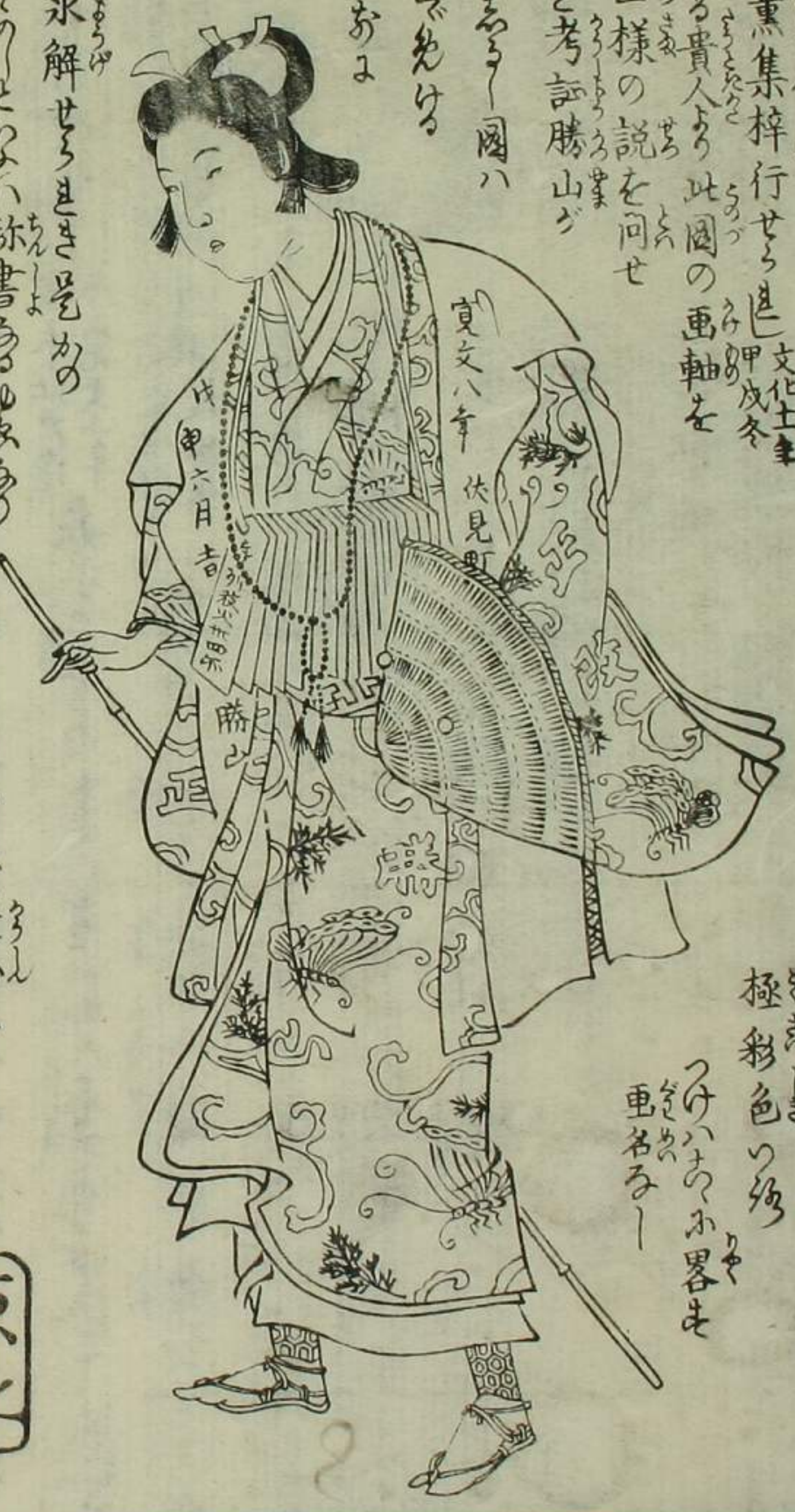
(二) 九鬘

髪は結ぶの形ありしより地より百年のち伽羅の油とて地をまとへたるのちの髪

ゆひづりまさむの形も名をとりしとて今も学ばず行はるかかきづり・まるまが・あま
の之様ありはまどかきづり・下輩も用あり島田の歯を漆て用あり 他国の田舎あり老女の
上下老若も直りしとて重宝あり九鬘多し此まるまがをかりしとてまるまが
まあつ **まのひかり** 字本江戸作 序元文二年 卷二「今のまるまがのひかりあまよりゆいそとむ」と
あり **続連珠** 延宝四年 板排書 「九ひかり偶まがの柳髪・藤かづり」
や九曲柳髪可道 多あり結れ九曲も百八十余年あよりあへし風ありしとて
古國ありまが九鬘聖の **唐書五行志** 元和末婦人為圓髪・推髻不設
髻飾 とて圓髪より丸まがとてまが又 **酉陽雜俎** 卷三「坊正ナリ叩門五六有
丸髻婉童啓迎云」九髻とて乃丸髻あり西土画ゆもまがとて
(三) 片外の権輿 髪つひ油ありしむりかひの筋鬘も兵庫ゆもまが髪あり片外も元来は結
髪ありまがの油のまがのち髪ゆひづり書見あまがあれど大なる戯場

○勝山順禮之古圖 縮写

古兄骨薰集梓行せらるる文化土主
翌年ある貴人より此圖の画軸を
爾して画様の説を問せ
玉ひらりと考証勝山が
傳のみある一國ハ
らたしそ免ける
其のちあよ
引さる
二書を
得て



此圖の
さしうて氷解せらるるは是れかの
まのふむのりとのふの琉書あるゆゑあり
おのふ勝山ハ世ハ奴とのなれて快婦と
のみおのひぬるふ花街ハ在るごの母の
菩提の為ハ順禮を学ばたふのいふべき
孝女ありのやれあをむめ

人物の丈一尺をう
極彩色の紙
つひのふ畧せ
更なる

めど其圖を
うのそ
たふみ残りの



勝山鬘之詳圖

・あふ頭のふ
全圖ハ畧せ



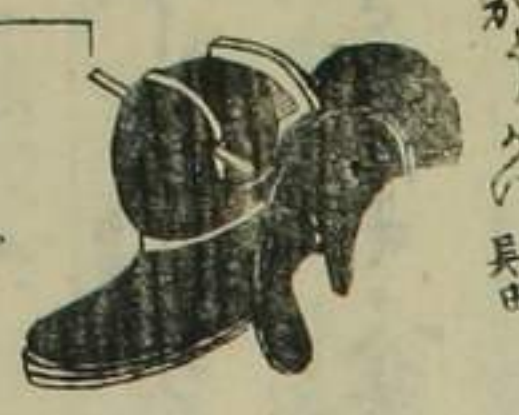
○此圖ハ天保二年辛卯の三月廿二日但馬國の人
某より画軸の書を添て高尾あるを幾代目ある画師乃
傳ゆふせと云ハハ袖ゆふのうらぶの紋あるゆゑあり
落款ハ宝永乙酉春大和繪師里水國之とあり高尾ハ十代目繪
師ハめろの門人ありと考証を記しおとれり



○元禄九年丙子五月江戸板
・女室藏一名女重宝記卷一ハ此圖ありて
かこころのふ妻女とあり上の圖ハ宝永
二年也寛文中の一賤妓ガ創意の
髪ハ凡五十余年世の人ありてふ
たふは是もかの島田ふのいふる女
装中の一奇也

あるは淫里の風をい布き市婦等が推林て流行せたるあり持の中み独片外のみの
まきとちまらあや
 四百年あ京都室町足利家の管中より起りて今み地づく下輩は移らばるひのみ
あやうま
 おくめなき髪の風あせありける。さて持の起りの足利義政公東山の北の方妙善院
殿の女中衆の髪を唇する簾中日記群昏類從卷四 百十四武家之部 女中衆の髪の事といふ条み
 「おほく人多くせぬ附按み御前へいさむまごさどゆけ附かのく長くてつらきさた
部屋みなる附き
 按みひうの平日ゆまげ
 髪多かあかくのみあり
 ゆひゆる西みべちのちりさたてゆひはるかり。ぬつ附より」とあり是蓋髪を假み
 片外はむまびみくをいふあり是髪かたづの推輿あふまき。又元禄元年の板
 女用訓蒙圖彙卷三の「かうがのつげの下髪せ奉公人多く持のはあまひうあて
風の条
 の局をい入りてつらだ又い持のがあまよよは似持あがりき髪かかくともあててかう
 がつまに及よああ地たふあり其様あつらへて常れゆひ振ふるありまあの世のせあ
 下髪せぬまの柄もあてかうがのつげをまるあつむうい遊女も下げ髪あふらうわ

とあり按み此文かの簾中日記を勅説あるやうあまど此比及いひまご簾中日記の流布
あまど
 あまらうむ古老の傳をかたるあまけまは見も片外のとトまうの一証とまへへいし
 ・かうがの鬘
 元禄元年板・女用訓蒙圖彙此
 圖ありかうがの鬘みあつらへて刺事
 此結風よりとトまう今よりあつらへ百
 五十余年のむらあり此項の掃枝ハ
 ・鯨・象牙をいあつ今ハ髪者一の
 けざりとあつぬ
 是并あり
 四 推茸たがの推輿
 元禄元年和乙酉の歳二年とあり作者の名ハ三橋老人とあり写本全五卷書名
 を寢覚草といふ隨筆三の巻み「ある老女の物語より奉公せし比京都より下は
 女中方の髪を葵たがの名ゆめりく見つまよとたゆ名朋輩あつらへてゆひける
 が今いづらもゆめりくあつらへりし名ゆめなきあつらへてと添りま此老女貞享
 二年の生れあり是と今の理言ハ推茸たがの髪の黒ま成靴を推茸は準つらん



とあり按み此文かの簾中日記を勅説あるやうあまど此比及いひまご簾中日記の流布
あまど
 あまらうむ古老の傳をかたるあまけまは見も片外のとトまうの一証とまへへいし
 ・かうがの鬘
 元禄元年板・女用訓蒙圖彙此
 圖ありかうがの鬘みあつらへて刺事
 此結風よりとトまう今よりあつらへ百
 五十余年のむらあり此項の掃枝ハ
 ・鯨・象牙をいあつ今ハ髪者一の
 けざりとあつぬ
 是并あり
 四 推茸たがの推輿
 元禄元年和乙酉の歳二年とあり作者の名ハ三橋老人とあり写本全五卷書名
 を寢覚草といふ隨筆三の巻み「ある老女の物語より奉公せし比京都より下は
 女中方の髪を葵たがの名ゆめりく見つまよとたゆ名朋輩あつらへてゆひける
 が今いづらもゆめりくあつらへりし名ゆめなきあつらへてと添りま此老女貞享
 二年の生れあり是と今の理言ハ推茸たがの髪の黒ま成靴を推茸は準つらん

か見えもあく名ゆりやげありあひたがみとそこの道」とあり又あま引く女用
 訓蒙圖彙と御所風と傍注したる圖右の鏡と符合す

五 たがの名義

女用 訓蒙圖彙此圖を
 のせ御所風とあり是今より
 九百五十年前御所乃
 垂髪せぬ女の女中の結
 風ありと



本居大人が玉勝間ハふ曰「今の世女の
 髪ゆひくけり」と左右へよりゆりたる
 一帯つとこの髪をあげまわちたをとり入り
 順集みいまれどもゆりゆるるをゆるく

飾りたる髪のはなを彭脹なる古言多し一異本 枕のきり 似気無物の茶よ
 つまみんせ・金葉集 恋の 朝寝髪維かく枕よなとつひにけりかみみあうらへて
 糸ありたをたをたあふまき但しゆめへの枕のあらなるゆめ地のづらでたるとゆひ
 今のいさきふ作らあり今按ふ金葉集の津守国基の哥より右よりさうとく髪
 ながみんせのつきなあり今按ふ金葉集の津守国基の哥より右よりさうとく髪
 ながみんせのつきなあり今按ふ金葉集の津守国基の哥より右よりさうとく髪

て髪ふをのほを彭脹なる古言多し一異本 枕のきり 似気無物の茶よ
 かみながるる人のあひつりたる」とあり按ふたを枕の義あり契沖法師の河社
 不「今中山里ののゆのゆてたなみなるうのやれゆ綱あり」とあり和訓栞
 中由大和ふ島このたなとの入ありとゆりゆりたがたがたをたをたをたをたを
 みさ成名ゆけてよふ名也又つとつとゆりゆりたがたがたをたをたをたをたを
 の道辺まの今も坂をたをたをたをたをたをたをたをたをたをたをたをたをたを

六 たがさの起立

今より四十年をより以前たがさ一との人物のききて布婦らゆりたるは是を用ひて
 重宝とて返々輕便はさうこののありて今もまきさうをたをたをたをたをたをたを
 人のひけるが其後ト也翁の隨筆 寛政 賤のを巻本 女をまきさうは道方あり
 ける抱ありをまきさう「延享の頃 按ふをまきさうを作りたる寛政より
 初て之をゆりゆり系より下り」を母をまきさう召はふ女どももまきさうゆりゆりてて



○享保八年京板西川祐信繪本百人女郎小此圖あり吉原の遊女見世
 の付
 さあ
 あり下小
 あげたる國の天和四年より御まそ
 三十年後より此頃ふりうてや
 花美小
 ろうり程を
 あり髪
 中櫛
 かんぎの
 飾りおきとも今よ
 ろうりおれバ飯林の下女ふゆ
 中しう



○天和四年江戸板師宣給本子の日の松ふえたる北里の遊女道中の圖あり
 此頃ハ髪のを更ふあり髪をまひ
 たるも見也帯のを四寸むりと
 ありのをうるあそび女まんの
 如くむりのハ竹朴ありしを
 ありあり



○蜀山翁所藏春曲の春物小此圖あり奥書左の如く依て按ふ兵庫ハ唐輪の變風あり
 度又長十八年
 末年
 六月中旬



○此圖ハ今弘化四年より五十八年お寛政二年家兄の作られたる物の本小家兄自畫の圖を写す・天明・寛政の北郭の妓より此髪より横兵庫あり

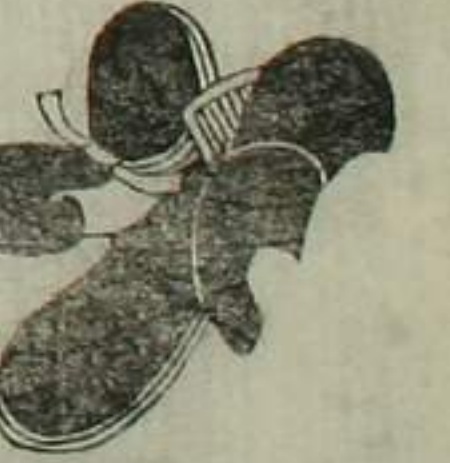


○此圖ハ菱川師宣筆天和三年江戸板の繪本あり・あり島田とてありハハありん

曲兵庫



曲田島



①元禄元年板女用訓蒙圖彙小此圖あり
 本書右の如く面体あり

工 ぬ鯨皮作りたる物あり」とありて圖を仰 傍注小「此物今まされて維あり人
 もあり」とありてちひさく圖紙のつたるふ寸法をあるまむゆふ大小并トがらし
 一日或貴人よりおかせふ尾ハ青のながけあり 時代の考証あり紀してよとあり
 かなを考のつたがらざるらん」とありて圖左のごとく

○延享年中ながさの圖



○按小元文延享の頃ありながさ
 ありのありまをより出さ結やう
 流行たる事物小見えさう此なが
 けハ長サ六寸あり以て其ながの長
 かりを和ふ

七 びんぼう

今を去ると六十余年お天明より寛政小ころ婦人の髪はびんぼうとて鯨皮又と
 づらふるとして綿のつるやうな物を作り尾小髻の毛をかたむきを張りゆりく
 結入風をとり一車今六十以上の人の知らぬ大坂の俳諧師近伊原西鶴が貞享

此の遺稿を元禄八年小板行なる俗つとて巻四小振袖の女を名けた髻の同着服

足袋たる物よりるまを二つ糸を引細小傍注たる中前髪野群談貞享二年森

ま髪とてのむのまのたつた物入る髪野群談貞享二年森

春三當世の女ハハ厨野群談貞享二年森

入りの毛糸野群談貞享二年森

萌ありまをびんぼう油野群談貞享二年森

西川野群談貞享二年森

文化のうつらうつらとせんきつはまゝせんをちのたまふらめををらるゝとて唱へて京
 ありてはし 京の安永の未ふ 一風ありて 今も市婦のよきとて今も世上翕然として此風あり
 復古一ともいふべし 今の子女たるはせんはしはるるまは珠一とせんそせの國
 ありのせり 伊の國の未ふ 聖の上古の髪を張歩くは風ありて



○安永八年京板
 當世の形と
 今書み此國あり
 是の形あり
 今書み結凡
 あり上ふ
 題と口
 山
 びんよ
 せんきつ
 せんきつ

天明七年江戸板
 勝川春章筆 繪本千代の友
 此國あり是由せんきつ張歩くは風ありて
 髪あり・天明寛政のころせんきつ
 八れまる女あり

事物紀原 卷三 馮鑑後事云晉永嘉中以髮為步搖之狀名曰鬢以
 為禮容即今纏髮特髻乃其遺象とあり然るに西土にもせんきを張
 ては風ありてあり

ハ かみの事

かみの本名はかみと云ふは源氏末摘花の巻九尺の髪は又枕の
 草子ふ七尺の髪は此の赤 毛のかまき ありたるとのりもみかみの髪はかみと云ふ
 ハ湯養をいひの内方をいひるなど片名をとりてよぶ東山殿比の女言あり文字
 髪と唇と和名抄の「髪和名加都良釈名ふ云髪少者所以被助其髪也」と
 ありて本年以上ありし物也又別は髪とのりも神代女の男女の髪は神代の髪は
 髪ふの飾と云ふは又の髪はふありて玉を髪にたててはかみと云ふは日本紀古事
 紀万葉の哥の中見へる髪は本居大人古事紀傳 黒御髪曼の解はえ
 たり又かみの中昔はえびかみと云ふは源氏初音の巻 髪は里の玉と云ふは

甚 かなしき事なり
 又中昔の時の生花を糸よつとぬた男の冠をかきし事ありて奇な事なり
 ・あつゝの西土の事なり
 [詩經] 鄘風君子偕老篇云「鬢髮如雲不眉鬢也」又
 [左傳] 魯哀公十七年衛の莊公城上より己氏を妻の髪を美るを見と
 便髡て呂姜 夫人の髡と為との事なり
 杜註云「髡、鬢也」とあり
 髪は和漢
 ありありとをさるゝ三礼圖中の髡の事なり

九 髪を束束する事

和名抄 容飾の具部云「秋名云假髪和名須惠以此假覆髮上」とあり
 のみ髪義云「此假髪との物置玉ゆめゆめとすくありし事 和名抄云「引髪」の
 劉熙が秋名の外春見多れどこのみはひくもくもく一 同書假髪の次は蔽髪と
 ありて「秋名云蔽髪和名比太飛蔽髪前為飾」此は悉く髪を束束する事

雅亮装束抄

五郎の舞姫のふよふと云々此髪は後世の髪なり
 女房装束着用次第圖云「いんごう紙あふゆめとふ字通ふ」假髪用鐵絲為圈編以

往ビヅク之髻とあり

4

此圖は東山殿時代の物

本書ハ写本を
 彩色の物あり
 着つゝ白織文
 印形もちかり
 地赤もやうあり
 全身を省畧す
 中昔の物語どもあり又ハ
 古画ありあま見へり

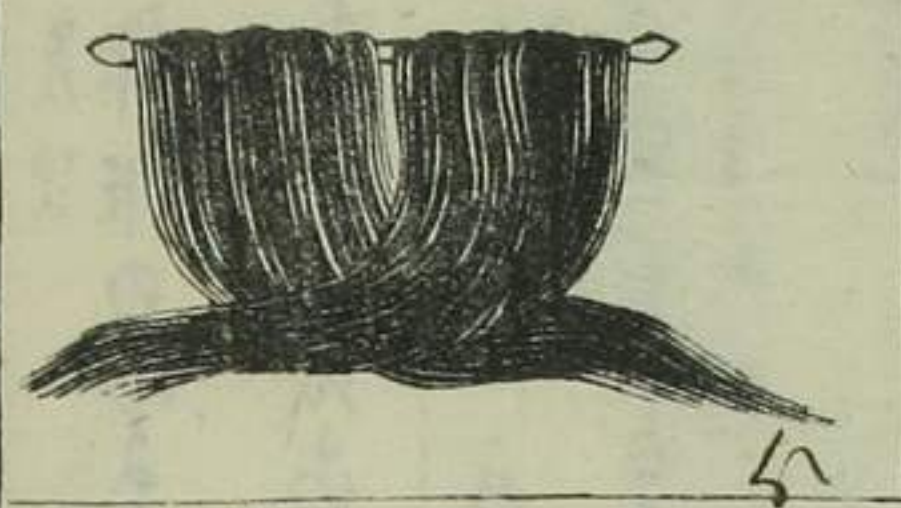


髪名曰「彭」とあり周の世
 あり編ト云「洪の世あり竹
 とのひけるよふ字通ふ
 たり今も鉄絲圈を作
 りたり「引髪」のあり和
 漢千古同物あり妙也

十 兒髻・文金髻

日本書紀 崇神天皇の御卷云「是時厩戸皇子
 後」とあり細註云「古俗年少兒年十五六間束髪於額十七八間分為角子
 聖徳太子束髪於額而隨軍

今亦然之（この一七）とある此支註ハ養老四年の時あり・束髮於額トあるを・（二）とあるふとと別せたる童髮を飄のふふふふふふ下げてゆふ事今由聖徳太子の画像みえたる一・角子と乃兒髻あり右の文を証し一・（三）とある千百余年ありありをある一・かやふ古風あるゆふ堂上の公達流元服以前の童形の御平日ハ兒髻あり且バ女童のゆふをあるあると女童のゆふ一を按ふいも潮花ゆふをある男童をうけ一・角子ゆふのえぬ男中も應對をゆふ一事の輕便よあるいふゆふあるあるあるある○（四）今由文金と島田をあるゆふあり見るゆふ人品ゆふ風あり見ゆ下輩へうゆゆ此風ハ泡景記（此書ハ元禄元年より延享元年まで三十七年）の筆記字本自序小武陽（全部）一鬢髻を揚結張（隠子五行子とあり）



安永八年板
當世ゆふ雜形と
の書み此國あり
されば近世ゆふあり
物あり古くハ須惠
と名づく

文金と稱す元文丙辰年より（元文）世人好之（元文）とある元文金の島田ハ今より百二十年まへよりあり一風あり

（十一）今の鬢の状ハ古風ある証

新撰字經（此書ハ今より千年あり）此書ハ今より千年あり
み鬢髻を不久太女利と別し（上）後のゆふあり
鬢囊抄（み鬢髻をうけむとよあり）うけむ物語（國のあり）み今鬢髻のこのや

ふくだめされといけちうくうげく一げあり（二）源氏紅葉賀（とありありありあり）
なめとる「（枕のり）」又「（巻）」髪ハ風よふたまたふされてちありなみとる
皆足寢起しうふふのいふふふむ彭脹撓のよりゆふをうけの髪を枕よ
あるて移るゆふよんのかきたる癖のつ也後世ハ殊よんをあらめて飾とす
けん女心得書（東山殿比）の用書 小「（枕のり）」のあらめたるへ一ちありあり中心あり
との且ハ四百年ありのまへううまをうんをあらめたる也女重宝記（小）髪も押ゆ
を半まざるの鳥かごとまなるちりて見あり」とあれを元禄のむりゆんハ

物なれどかの蛇さし流して甚しくありがやをこれ今の市風の髻ハ復古と云へし
 (十二) おたぬ結 ・ 櫛巻

今の市婦等蛇盤たるもの状をみて髪を結をたむとむまびとの入替の名
 義ハゆひのさざれと西土は似る事あり 柳嬢記上採蘭雜志を引ると和解を

「魏宮庭は一緑蛇あり毎日甄后梳粧時此緑蛇盤髻の形を結后異之蛇の
 盤ふ致て為結巧あると天工を棄ふ故后の髻毎日不同号て灵蛇髻と為

宮人と云々擬ととも十ふ一二を得む」とありおたぬとむまびとのうらうら女の結
 ありるは火蛇髻の名ぞふさくらかづまき○古語は一鬼街小走バ万户追之

との且ど識志ある者山豆一鬼小狂走せん物の流行するも鬼の街を走ら
 如く安永の間櫛巻との髪ハ髻の風流傳廣く二都よかよりせのりとい

武野俗談 宝曆中淺草寺内お福茶や 今いふみるをわかたて名だの女
 ありて髪の上より櫛巻をさうしうふ巻とみく結びり尾と櫛巻を世上の女の

○櫛巻との髪

此國安永七年江戸板
 鈴木春信画繪本
 貞操草小あり上下
 二冊の内櫛巻の女七人



事と云ふ」とあり明和中祇徳が白
 小櫛巻ふ春の柳や二日の月又柳
 樽編三櫛巻ハ娘の身持のうら物
 と云ふて其流竹をうと云ふべし物
 此書を作るふつてむく此女風を習ひ
 りては二百年おひあめあま一風
 おとむる所の風三四十年も変らじふ
 百年以来十年を不期五十年来ハ

之年を不侍然あるみかどとぐの二百年かろくはる女装中の美事也
 (十三) 貞享年中女の頭飾物十六品

貞享五年京板 盛衰記 今この女むらうつと変をも仕せし身を
 なるむ物の道具数々あり首筋より上より入用の物十六品ありまづ後の

皆切之なり此時驚回妻曰太上大臣と十人の御炊小切髪を交易ての長楯哉

仕丁てめあひ公なるありと云り妻敢て歎愁の気きく常の如く咲けり本各漢文摘要和解

とあり西土小由駢事あり世説賢媛陶侃少くして大志あり家酷貧し母の

湛氏と同居を同郡の范逵との人孝廉後者あまのりて陶侃が家小宿りけり

時小氷雪積日侃が室如縣磬るるにバ衆客の食中窘けり侃が母頭の髪を

くて地小委ねてを截て二ツの髪作髮とありて賣數斛の米とあり柱を

斫て薪と為薦を劉て馬草と為精食を設く徒者もを乞ひ所也摘要和解

光秀浪居の比友来り一時光秀が妻髪を賣て酒小之を実跡とて

物小えこれと恐くハ件の推成陶侃らぐ車小よりさるるごとくなり

志有りける女のをとも髪切らるるなりと國てけりける大藏ハ鹿材哥子早振

かみもあつるのめをいへるるが小結木綿とありハ二とありけり女小め

男小髪切られるるありんあち今もあつる又のみと自の爲せし中堂小あり

録夫夫婦同棺の条は軍士李青が妻春見年廿夫疾革し顧て妻小謂吾殆汝

其善事後人春見ありて髪を截て信を誓ひ再適するを介を夫死て囑匠

人棺を大造せ自経死す里人大小憐夫と同棺めて葬りぬとあり此輟畊録の

作者曰此事至正朝戊子歳小有し事也此張春見ハ寒微く生長て礼節小困

けども尚夫婦の大義を知り如此世の名門巨族を顧み動衣冠を以自眩夫

の骨未寒有求匹之念萌者是等の人ハ張春見を見て少ハ夫婦の義

心を知しとのりもれのりめをり琵琶記小蔡伯皆が妻髪を賣て親を

葬し事孝と貞とかの張春見と美名を並べ揚貴妃外傳小揚貴妃如媚

けのり玄宗小ありけりられ時玄宗の心をきりあやさんと髪を截ていひけるや

身小ある物ハのりむ君の賜あり独り髪の小のみ父母の賜をば見を奉るると

けりあつれば玄宗貴妃が髪を見て心とけりまむ貴妃小感溺あつるよりあつる又

全唐詩話二小唐の世貞元年中太原との所の妓段陽簪とて其情人と婚を

約しける小情人都へける侍のひける吾家小あつる相迎んとて家小取はち更

又びんぼうのつらきものつらき俳句正保三年「**二車**」板難舟撰「**夷風**」岸の柳のあらしの聲かき

・びんぼうのつらき乳母が**藏玉**又**塩尻**専保の比尾張の人天野信景との博學ある翁の作写本

小天文以前の武士の風俗をいふ下ふ「又五味菖をりて今の男女盛に髪を

かむむ是も中世よりせし事こそいふ頃日ハ三州某の谷びんぼうの取つて取つし

けるとを京師難波東都いささ也所々の都会にび田舎の未とまへ婦人足と

用ひざるいふとや是も一時の妖艸といふ言ふや」といふれは此作者矢野信

景翁の行年七十三で専保十八年癸丑九月八日卒らるる一人あれが寛文元年の

生也依てゆめよ百卷ある物の第十卷に此頃とありおぼせらるる此翁成りお

世をゆるる元祿の末より正徳までの事あり此頃及ハびんぼう油のつらきあり

時をいふびんぼうのつらきありしは古風の残るるありん**物類稱呼**三「さねのつら

大坂まで・びんぼう・東國までびんぼうのつらき・出雲までさねのつらき・伊勢まで

らるる・出雲まで・ありのつらき」とあるが諸國あても用ひるといふ今頃の女中ら

びんぼうの外よまた油きんぼうの重宝あり五味菖の名ハ百人一首と知らるる

あらん専保十一年不角撰**百入深**一名俳諧とて百人一首のものをなちいさたるゆ集

の中よと条右□**臣を**「花をいふ舟席帽子ゆさねのつらき」是ゆさねのつら

きあり一記とまへし此外ゆも檢証あるとあると例のつらき

⑦ びんぼうの油の権輿

人王四十六代孝謙天皇の御世天平勝宝の年間諾樂の兼師寺の沙門景

戒が作りたる**日本灵異記**中「故京の元興寺村を修行基大徳びんぼうのつらきの弟子

信嚴法会を脩行基大徳を請ひ奉りて七日ト是説法あり道俗集りて法を因

聴衆の中ふ有一女子髪小猪油を塗たる居中法を因く大徳これをこゝろて

噴言く我甚是哉彼頭小血を蒙たる女速く引棄よ女大恥て出羸三」

本各と何り按小往古ハ天皇の供御ゆも獣肉を奉り一車國史とされは

下賤ら獣肉を食ふハ常ありれば右の女ゆ手あつる猪の油をたき縁ゆ

一ヶ年小付切る人もあり二年三年小付切るもありそれを乞羅の油分る人として
笑ひせしる者も亦希髪のお若衆は多く付る右の目茶貝一ツの油をえき二々
月をふ付切る成人の子息十五六歳の若衆右のやう貝一をの油を二月月
付切ると取り沙汰する也其意ゆゑ乞羅の油分るの耻の中うみて其の縁やう
見事ある乞羅の油の鹿あらんと見せめて笑ふ人あはれ多く付る者も亦言支
をたそく争ふ事あり今ハ保中 大なる貝一ツの油を二三度小付るゆゑ江戸中
乞羅の油賣所多し女中猶小付る也以上一糸全文 仰の乞羅の油ハ寛永の中比
下輩の手より起り廿年の後明暦のいづれハ遊女をとりつたりけん王海集 明暦
板井「蒼まらう乞羅の油う花の露」又箕山大鏡京人吞舟軒箕山作
自序ハ寛永三年とあり「乞羅油松
脂煉ハ髮枯てある蠟抄を用ひべ」又続崎人傳の中・松岡恕菴の傳中ハ
東涯蠟燭の流し成奴僕ふふあらうの人のことを問ひけるふ先生曰「乞羅の油
ありと答ふ事をもるや按ふ先生の室曆を成んは歴する人あれば京まで乞羅付

高ふ店もある附あれど質素の家やいらう替くのも多し私製下用のいといへう
以国辭の古朴ありどあらうふふいづ方貞享五年板
上の物十六品ありとて数へ一中ハ髮の油・乞羅付といふ此比及ハ地女の容色を飾
るもの乞羅付を用ひていへうさきと今のごとく婦人ハ貴賤の必用ありあはれう
けん正徳末
京板一「世間娘氣質」むりち女のみやらの油は乞羅の油の外ありしに又
羽州天明六
年板「乞羅の油昔ハ茶種屋や高ハ男の髪をうみ少くつひ女ハ髮
うみ少くつひ物をも日くふ梳けるゆゑ臭気ものぞ奇麗なりしハ四五十年
以来男女その類り油を用ひ元結も以前ハ貴賤とも紙縷をてまゐりけるを今の
風俗はあらふまゝハ油元結の店も次第くふ出来たり」又我衣前書
写本の物「乞羅の油
寛文年中糶町へ谷島主水とのハ女形油見世をせし日本橋室町一丁目へ若衆方中
村敷馬油を代出せし淺草虎屋市之進ハ少くのち也其頃武士ハ棲ふくふ其比
と寛文のうみ油
つは是とも町人百姓ハ不用に徳も六蛤貝一兩入三兩入曲物ハ五兩入上油一兩ハ付

ろの「のめんなんむりて井のふみあめんめつろのなを孫なるをのせ地とてむりて
あびが今いんむ **本朝世事談** 享保十九年江戸板「伽羅の油いふ保・慶安の頃より京室町
盤の久言賣と下む其後京三条の宇賀徳五十九元江戸にて其のせりおたの
ろ」とあり井の舗の物よえろ兩國をよめのみ **浮世物真似諸藝口写** 此書全三冊
横本江戸板 刺洋の考ハ奉 全部悉く時鳴わつる物賣りのいひとありい
見世物あとの口上をせのまふ紀一なる物あり井の中ふいめぐじしといふや町を
見せるべらなう **見世物** わりて國ありたてろ幟大坂下りべらなうとありて異
体の男唐装束を テ 手は唐團扇を持床机ありたるさまを多けり容白や
うげふも周て按ふ世を物の中しとろ人の魯純あるをてろとろいひとろつひま
折結とありしとて元禄間の草子どみ見証あり近年駱駝のし物ありしは
物の長大ゆへ使用あつたつ物をらたつていひされどくだい偏て普うらむべとろ
ハ万幸も通むるゆゑ百五十年來歴して今橋市街の万戸べらなうといふ紀を

いひざる日いあり人外ある騎人の名斯世俗の一結とまりて穉歳とせのちへつていひささ
人事の一奇事とろいへらなうの國考ハ骨董集と編よりいへ。さて右の書
せり **むね** ちの店の油のいひとよ **あむさせ** の代りつとも様のいひを
あづろきやらの油といへせむしと地いせぶらろ中 **畧** 和田川町は小家あれども
かろみ居完をかまへ代りかそれども名額ハかろむ花は **あむ** 花や **あむ** 花
白の黒いかんかひやとろいひあひいひとてふ吹後うづも身 **あむ** 和羅を **あむ** 唐
羅を **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり
まろの油 **あむ** や **あむ** まんて **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり
まろ **あむ** 用と **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり
五分 **あむ** の一両が廿四文半両が十二文小貝が六文 **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり
まろの商い **あむ** いひ **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり **あむ** けり
羅の油 **あむ** 秘方 **あむ** 唐 **あむ** 蛭 **あむ** 八 **あむ** 松 **あむ** 脂 **あむ** 三 **あむ** 甘 **あむ** 松 **あむ** 二 **あむ** 丁 **あむ** 子 **あむ** 七 **あむ** 白 **あむ** 檀 **あむ** 一 **あむ** 苗 **あむ** 香 **あむ** 四 **あむ** 肉 **あむ** 桂 **あむ** 三 **あむ** 西

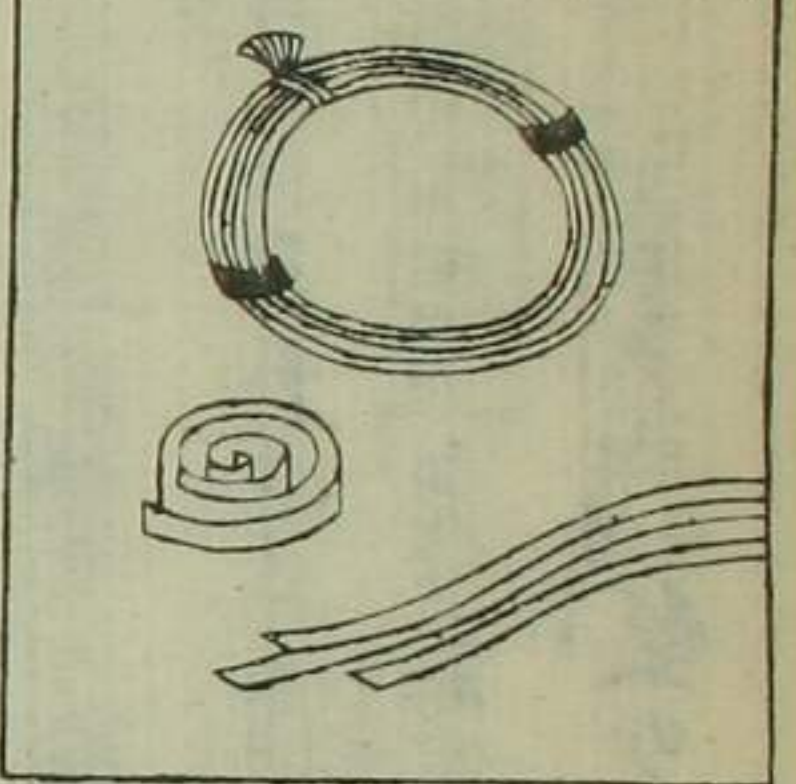
青木香ニ・まんてうと胡麻の油加減ニてよく煮下つめきぬ袋をて漉ニて
 かうアうのうニ合ニせ練ニとあるまんてうと六猪の油の赤黒あり香子保のころまぶ
 のの油をたろひとてさうニ獣の油類ニふ冷ニす事神佛の油をたろひんや此ニと公若
 とて板本のせいのふぢやあふニる日本灵異紀ニ猪の油を髪につけたる女は
 行基ニ廿廿の目ニは顔ニを蒙ニたる女とてれう今ニ此ニ髪ニの油ニをまんてうニはひニあり松
 やめニあニとまニくニさニもニあニんニうニ〇ニまニはニ油ニもニ古ニくニあニじニ物ニとニえニてニ元ニ禄ニ十ニ二ニ年ニ板
 初音ニ呻ニ嘯ニ大ニ鏡ニとある物類ニいニひニなるニあニはニ萩ニ陸ニ沢ニのニ壺ニがニまニはニ油ニ女ニ形ニ水ニ木ニ辰ニのニ女ニがニ紋ニ
 などをとあり辰の女が紋ニ是ニ也ニ其ニ物ニをニ高ニひニたるニをニいニりニ又ニ俳諧ニ菊ニ枕ニ宝永ニ二ニ湯ニ
 あぐやの縮ニのニ白ニ入ニはニたニ油ニ針ニのニ魚ニとニてニ糸ニ親ニのニ糸ニとニてニ西ニ土ニハニ太ニ古ニ更ニ髪ニとニ
 小の國ニあニるニ櫛ニのニ油ニのニとニ古ニ詩經ニ衛風ニ伯ニ自ニ伯ニ之ニ東ニ首ニ如ニ飛ニ蓬ニ豈ニ無ニ膏ニ沐ニ誰
 適ニ為ニ容ニとふ膏とあり乃髪ニのニ油ニありニてニ後ニのニ世ニふニりニてニ白ニひニ白ニ水ニ
 濡ニもニ書ニ見ニありニ此ニ章ニ句ニをニ俗ニ解ニバニ伯ニがニ東ニへニ旅ニ立ニけニちニハニ髪ニもニよニくニはニらニばニさニうニみニぎニ

をるあり膏ニてニうニたニくニくニゆニいニ沐ニもニまニへニけニとニ雅ニをニ適ニとニてニ為ニ容ニするニ事ニ廿ニ人ニ月ニ
 もつらニとニ慎ニ少ニ婦ニ徳ニをニ奉ニてニ女子ニ小ニ教ニあるニ章ニ句ニかニうニ此ニ符ニ經ニ小ニ似ニるニ御ニ國ニのニ
 万葉集ニのニ哥ニありニ卷ニ十ニのニ哥ニふニ君ニあニくニハニ何ニ必ニかニげニんニ攝ニ笈ニあるニ玉ニのニ小ニ橋ニもニさニんニ
 とあり「物せげニてニ意ニ地ニあニげニ近ニくニハニ正ニ徳ニのニ比ニ井ニ上ニ通ニ女ニ九ニ龜ニ家ニ中ニ和ニ洪ニ東ニ路ニのニ旅ニ
 寓ニのニ文ニふニまニをニわニかニ境ニもニちニりニはニ曇ニるニ新ニのニ月ニ是ニハニ字ニ者ニゆニかニのニ章ニ句ニみニらニせニんニ
 ようニみニんニ心ニあニきニ婦ニ人ニハニ縁ニ席ニのニ文ニかニ事ニたニぬニうニたニめニもニ地ニのニひニやニまニ安ニ家ニ小ニ在ニてニ為ニ容ニ
 いたニ也ニまニまニとニまニやニてニ心ニのニまニるニ遊ニ樂ニまニるニあニるニあニるニ事ニ中ニのニ為ニもニとニ油ニのニつニてニみニ
 符ニ經ニをニ解ニぬニ光ニぬニ子ニごニのニ本ニのニほニりニまニるニ傍ニまニるニあニるニ事ニいニとニまニまニはニしニ
 十 髪ニみニ伽ニ羅ニをニとニめニるニ
 中ニ昔ニのニ物ニ語ニどニのニ衣ニ履ニハニまニうニありニ髪ニ香ニ香ニをニまニもニまニ書ニ見ニいニとニ多ニ後ニのニ世ニ小ニ
 いろニもニあニるニ東ニ山ニ殿ニのニ凡ニのニ物ニ挿ニ入ニ記ニ本ニみニ火ニ取ニ此ニかニうニらニこニ色ニハニゆニひニとニまニいニ
 物ニありニあニひニちニめニめニのニもニらニ髪ニなどニかニをニまニむニふニもニみニとニあニりニちニつニたニ世ニいニ

上よりたゞりのかは谷みかひるとも空地の水をたれて池あり深草むく人まひれ
ば夢の花穂よまのびあのみ笠帯本をもつきとたる雨風よつひも虫の音ききとさうり
大さの空すうんある小侍みかあうまき月哉とをりし暮さうも明あつ北ふうた
寤りて冬夏りづううづ竹の簀這ひあや夢をかざるもろたあ中畧まの思等
機車より輪を来てくる世のかさうみあつひけり文七といふの元結あく所ふ
ありぬるあり非か文七ふあうるふ庭のかろむ文七あひぬ其角かかくのひをのて
文七の元結間の髪匠の名ともゆりゆれどさああうる戯子中村仲藏が自筆の
日記友人柳亭種彦宇都宮の戯場とて鳥山へいする下ふ此雨ハ紙の名所あて
むう文七といふ紙をたあて是がまなるを元結とせしあ人あまけり新ひ
し今より七十年あ安永中の中あり又本朝世事談享保十
文の比始る文七ハ紙の名ありとあり是れを証やくて文七ハ紙の名と決むべし蓋
紙をたあて文七宝永のころ江戸の書店にて所々の空地をかりて元結はくろしゆあ

其角が文七といふの元結とすといひもあまうるいふあかとも紙の名ある事明
内云其角が修ハ其場町今字を植本店といふ所あり組練先生も此所は住り
其角が白み梅が香や隣ハ菰生惣右衛門と組練が俗称をたあて下の句と
あ梅ハ好文本の異名あるを以て儒者準香の一言み絲美をたあて菰生惣又
賞をいふ梅香隔歳在隣家といふ白樂天を襲ひたる段奇妙実蕉
門の喬木誰う肩を並ぶさうらとせ遺墨も芭蕉と骨を同せれ備載宝永四年
二月此地ハ終る年早九歳隣の梅より十六年とあちぬ組練ハ行年六十三
のたけあごといふ物近きむうハ平元結といふせれを鬘へむまびてを結をうたるを
と結のゆひとて飾とあうるあり正保中の板排書山の井翁李吟板排板排板排のた結元
結う二日の月と三日月ふとてたるあて替らうるさうも今元結と浮世元結
とのひけん貞享二年板大一代女春あげ島田わくしむまびの浮世のゆひと娘の
さまふのう又同五年板盛衰記春三髪のかうりけあをいふ所ハ平髪とあまのび

正徳二年の和洋三才
國會此國あり今より
百五十年前の元結
もな多長も今と
らざるを見よ一是
賣り物のさまも



○此國ハ友人所蔵の
画軸彩色色結本
美人柳下小独
立る國疑識
あはれを明通と
又髪丸丸
鬘小似て且さふ
元結のさふもあ
ゆふの髪の人
のみ摸一の電の



通編畫圖 百樹男 京水百鶴筆

○西土の元結あり 事物紀原ハ二
儀実録を引ると和解を「燧人
の時爲髪但一髪を以て相纏て物
を繋縛」と云ふ女禍之云ふ至て
羊毛を以て繩向後繋之之後世ハ
易之ハ練絹を以て之。頭帯と名
繩之遺状也」とありされハ頭帯ハ
ゆひの方より近ハ練絹を以て之と

のくば也。ともかくも古き物よえたる元結とありハ組糸の物を飾多 雅亮装束抄
紙の種つとくぞ実用の物ゆへ今ハ元結多なき。○さて此書・鏡を始り
拂り次第一々由元結よりゆへ髪丸の頭の上の事ハわじつるゆあれとさふゆへ
是より假粧の事をいへんハ熱脂鉛粉をさるとせんあれと齒を染て女成り
まると古今の通儀女子の祝ひ事多し。まづとらめをいへべし

御齒黒の起原

和名抄 容飾の部 黒齒。文選註云・黒齒國在東海中其土俗以草染齒故曰
黒齒。俗云波久路女今婦人有齒黒具故取之」とありとみ今このゆハ
此和名抄を作らる延長年中の事あるは今より九百廿余年の女ハ齒を
染たる事明一其以前何の世とをさるめする事記立けん抄物もゆへん
とらゆの世漢字より其源を究んとおのよまづ右・和名抄ハ初なる文選の
注をみるハ 大臣註 卷五 左太冲が呉都賦ハ「烏澣・狼臙・夫南・西屠・僭耳黒齒之
女裝考 卷四 廿八

酒とあるを列注ふ「夫南特有巧才。衆夷不同。西屠以草涂齒。深白作黑云。」又同書木玄虚が海賦に「或沉之悠々於黑齒之邦」とある成李註に「至東南有裸人国。黑齒之民」とのう此外日本に属して黑齒といふは山海経。吕氏春秋。史记趙世家。漢書東夷傳。淮南子。魏志東夷傳。ことらみる。漢北國の古書にもある。此書にのみ黑齒とあれは本朝の上古齒を深たる事疑ひあり。然るに國史の古書にもあるはいつて。若し下輩の歯を深て上輩に移ざりしゆ。名國史よ。えさるは。彼國より通商するにつけて下輩の黑齒をさるるを傳國して日月の照るは。日本のみ黑齒ありとて。わきまをさるるのひけり。扶桑國考の豐後國の伊波比洋の西南の那島と嶋あり。黑齒之國といひ。疑ひあり。是也とて。小串重威が豐後府禁姫島考を引り。いさどより。彼が東夷傳のさる也。外の各々の國あり。て。黑齒之邦と海の賊あり。いさど。一島をいひ。いさど。あは。女装の横道あり。深く

たごらむ。さる上。古の齒を深たる一。証も。あ。一。糸あり。証も。あ。う。て。織者の教を俟つ。古事記に。應神天皇。人皇。近淡海國。越幸時。木幡の村に。到坐其道。循。比布礼の意。富美が娘。矢河枝比賣。と。入。扉美娘子を見玉みて。家。と。間。せ。み。て。其。明日。比布礼が家。入。坐。て。御。酒。盞。を。矢。河。枝。比。賣。玉。ふ。時の御哥に。長哥也。美知尔阿波志斯。袁登賣。宇斯。呂傳波。百云。此。を。び。て。ろ。袁。陀。呂。迦。母。柳。を。以。波。那。美。波。志。齒。也。比比斯那須。中。麻。用。賀。岐。許。迹。加。岐。多。礼。ひ。ろ。を。り。下。畧。さ。る。然。波。那。美。波。志。比。比。斯。那。須。と。い。ふ。言。を。本居大人が古事記傳卷三十四に。波那美波志の齒並。喙。よ。て。齒。の。並。生。たる。齒。と。い。ふ。こと。あり。比。比。斯。那。須。ハ。夢。如。あり。此。の。字。ハ。中。畧。さ。る。此。二。句。ハ。次。の。一。句。を。隔。て。和。迹。の。序。あり。其。ハ。九。迹。と。い。ふ。地。名。を。鰐。魚。取。て。此。魚。の。齒。の。勝。て。利。由。あり。中。畧。夢。ハ。云。鋒。の。如。く。甚。く。尖。り。て。刺。突。拍。る。故。に。齒。の。鋭。み。譬。給。つ。る。中。畧。契。沖。此。二。句。を。齒。並。者。如。推。ら。て。斯。ハ。助。辞。あり。齒

並のうらぐさと推をあらなう如とあり。詩云。齒如瓠犀ハシカと云似たることあり。と云
て此嬢子の齒の工しなる非あり又師も百云師と同其意を志比比下の比
注りて美み通ひて推実うと云れたるもり為。先是若此嬢子の齒をあら
詔るる眉画の次みとをあらはせ此の在る也其故は先づ眉と齒を
次第も眉は先は齒は後みあらぐ又たその其も齒を先み紹ふも若然ら先
方みとそ序の詞はあらとあらみ先ある序ありてふとた。齒並はと紹ひ
返りて後ある眉み長き序の初みとあらとを左右み見せ嬢子の齒み
俄みあらとあらをたひ上ツ御哥あらも齒はる俄あり且斯の助辞も
甚徳あらと決て助辞を置きたる非るを也以上本居大人の説多。持もく本居
宣長大人の天下みゆるされる博達と此大人の著書の為み御国守は終
益を得ると趙璧を得て闇夜を照らす如く押の百樹此大人を師とせし
を常み梅此ゆ多は此大人の著述は裁かあら終て續。其多る中雷伴の

古事記傳ハ学力を竭されたる物なり一言半句とのをも金玉の屑あり唯り感
伏せらるんや然らぬ我が漢字の布敷をあらして博達の雷川を過る甚愚魯
けをわの「齒並ハ斐如」の統は於て竊み綴く。持もく應神天皇の件の御哥ハ
山城国宇治郡木幡村の禰尊九迹と云雨の比布礼の意美との久人の女矢河枝
姫とのみ美人み行遇ひ玉ひふらびを玉み名も任所も同ひ玉みて明日還奉の
時ハ汝が家み入御と紹ひて入御ありし附御者み奉りたる解魚み奉るくも
らみゆらまゝと云ふものへかて姫よゆたあひわの。と云ふものもみく姫の
麗美を称する御哥あり。またまの姫が天皇よゆきあひる附のまこと古書みあら
推量するみ白き衣赤き裳髪ハ垂髪へも抑らゆもあらせも赤土城類みあら
假粧の。古の粧ひハみ抑らぬ。他行の附もみかあら遊須比。此事あらはの
布み作りたる儀あら顔ハあらとあらあしあらん。また件の御哥み姫が齒乃
と儀先と眉を後み紹ひたる儀あら。如く大人不審せらるる如く

凌學あざむ心をあつめておのひとつるふ天皇路を姫よゆまあひ手ひ姫がゆたつる
しるまぶこのたるぬ御目とまりとよびさめさせおの付あつるの濃須比の
まぶまよりこそ一はれと濃並の美くくた任家をも回をま時ハ眉を濃くした
たるをもよ御らんとは常のよく美人あま入坐玉りんおれせもありあらんさるう
みきのみゆらんトなるまみ次第と「みちよ何はあをさあううろをいをだてろ
かよはふみは志ひか次まよかきこふかまたれ」とか一よりうまぶ
二よはれとあまよめりつる艶かりしゆな今日こ入坐てよくこればあつる
ふその御哥さる歯を眉の先よわく不審とをわらうまた又御哥ふ「波那
美波斯比比斯那須」この比を衍文とするとさあふ一とあみを歯並ら
りちろんありひをかすを契沖真淵両大人の説をわらうとさうして其如とある
論あけま「菱ハ鋒の如く甚く尖りて刺突物故又歯の鋭みたるとあふあり」と
いひ其系も「丸迹ふ地名を鯨魚と取りて此魚の歯のまぶを利由あり」と

いそれらういあらん妖姫の歯菱の如く尖り鯨魚の歯のまぶとあれはあつる雨美
嬢子と天皇の御意みかあふまかの路まは口を流らんとなる洲只鬼嬢と
て逃さうまんは歯並ハ菱の尖りたるを賊せまひるまあはじ「波那美波斯
比斯那須」と歯並ハ菱の如く光澤ありと黒歯をうつやうある歯を菱よ
準て称美玉ひるまあらさるう然おのうハ妖姫神天皇の御世西土ハ西晋
の始祖武帝が世ま日本をきて黒歯とのひる伴の誤藉ともハ世武
帝が時よりあ物の物まは應神天皇の御世中黒歯なる風俗ハあや
あらんまは此矢河投姫もまらめあらんとをわらう是則「比斯那須」
を黒齒あんとまるの本拠多うま山海経ハ夏九の黒齒夏の禹王が作や
西土も古くハ信がう信がなまどまの禹王が作とまは御国ハ鸕鷀
草昔不合尊の御世より此頃ふ作りうとハ山海経を証とまは黒齒
ハ神代より風俗ともいふとまはあはじと押のハ一証あり此應神天皇より

御四代前景行天皇の御時熊曾・建の二人王命ふあらはれんと王子小碓
 命御父景行天皇の命ふあらはれ御一人を討ふ行せむふ御歳十
 六の時ありと見ゆいまの御髪顔ハ生さうけハ我道ゆゑふや
 古事記 女子の服飾ふ易玉ふ事を古事記 景行天皇の巻ハ陸奥にも乙女
 のさまふゆひかへ玉ふ事ふどまふ巨細ふまらへあまど黒歯一玉ふふとま
 依てあふふ此時かの者を欺得て討玉ひハかまら女をあらめく酒宴まる席へ
 侍らるるあひをこ女とあひそ戯れたる所の事あまは此比及ハ婦女をあらめ
 風俗あふ必まらめあまの事をも古事記ふあまき紙まらふとまらるるを以て推量
 ままはまふひひる漢籍もふ黒歯とのひハ今の如く天下翕然の風俗あふあま
 ちるあまはれ和名抄みえたは千年以上より婦女の黒歯したるは恒あまは今錦
 殿蓬自婦女して必歯を染るひひく古き風もあひける・猶七八百年まへ
 あらぬの蓋黒めの事ふひつゞくふひとまらるる

○ 歴世女装考後編目録

- 婦女の歯を染る由縁の考
- 八百年前の中昔の比及歯くろめ此事種々
- 公卿の歯を染玉ふ由縁
- 武士の歯を染一風俗の未歴
- 鐵漿を・か蘇といひ・み水ともうきまは水ともいひ一事
- 中昔の比及女子六七歳の比よりとらめあたる事
- 近古十三歳をかね初とせむ故実
- 今の如く眉を拂ふる上古より此風儀ある事
- 上古の画眉墨して作る事・西土の如たまる
- 和漢燕脂の起原
- 中昔のころ面脂と口脂と二種あり考

- 上古の女は假粧けさうの考かう
- 今ものゝぶらぐ眉まゆとの名義めいぎの考かう・ぶらぐの文字
- 和漢わかんのゆり頬脂ほづつひたる事こと・近昔ちんせきのゆづふ・赤子の額紅点ひつひんふせん事こと
- 眉まゆふとの入和訓わくごんの考かう・ぶふをわらふとの入由縁このりよ
- 鉛粉えんこなハ持統ちとう天皇てんかうの御時おんときを始はじめとすハ非ひある考証かうしやう
- 八百年前やちひせんぜん鉛粉えんこなの形かたちハ考証かうしやう・押おしらぬの古名こめい・異名いめい
- 清少納言せいしやうなごん押おしらぬを濃こくつひ事こと
- 西土さいどの婦女ふぢよ押おしらぬのつけ事こと
- 天竺てんぢく少せうて親おや如に未まの在世ざいせいふゆらぬあり事こと
- 西土さいど少せうて燕脂えんじ・鉛粉えんこな・膏澤かうたくの神かみの名な
- 爪つめふふをさす事こと・西土さいど少せうて婦女ふぢよ指甲つめづちを紅あかく染ある風俗ふうぞく
- 上古じやうこの女衣服いやくの事こと・手足てあしの飾かざりの事こと

- 布ぬい・錦にしき・絹きぬ・木綿織もくめんあひの始原はじめ
- 兵服物へいふくものとの名義めいぎ・小袖こそでとの名義めいぎ
- 振袖ふりそでの起立おきたちの考かう・袖そでハ帳ちやうとの事こと
- 上古じやうこ小せう於須比おすひとの女めの被ひり物ものの事こと
- 領巾りやうきん・裙帶くろんとの女めの身み飾かざりる物ものの事こと
- 上古じやうこより中昔ちゆうせきの末すえまで女めハ下輩げはいも常じやう小赤裳せうせきまを着またる事こと
- 被衣ひやく・鞋かき・かいざり・つがさうつがさう・あづまあづまからげの事こと
- 腰卷こしまき・湯卷ゆまきの故実こじつ・ゆまき・あさあさのとの名義めいぎ
- 女の膝ひざへうら赤鳥あかとりとの物ものの事こと・赤あかままへへれ古ふるくあり事こと
- 婦女ふぢよ衣服いやくの文様もんやう古今ここんの沿革うけつりの考かう
- 今いまの地赤ぢせき・地黒ぢくろ・茶屋ちやつドつど・本ほんつドつどの名義めいぎの考かう
- 摠そうゆゆららふ文字もじ入いの考かう・中ちゆうゆゆららふ裾すそゆゆららの起立おきたち

- 女帯 古今の沿革・下げ帯・腰帯の起立
- 醒齋公翁の骨董集よかきしり・虫の垂絹の補遺
- 女の雨衣着る始り・綿帽子・頭巾をくぐの弁説
- 中昔靴子を足袋とものり事・近古婦女の靴子
- 古今婦女の笠の種類くぐぐの考証・今の日傘の起立
- 婦女の履古今の変格・輿の代り小婦女人又負る古風
- 婦人雑事之部
- 古今婚禮の変格・産養の異同
- 北の方・御新造・かみさま・かあ・をの類・女の称呼をくぐの名義
- むすめ・むすこ・せせとの名義・文通のしり・封皮よつと考
- 勤仕の女中小・老女・中老・おろした・おまを急・おまを急ひとの名目の考
- 中昔宮女の合部屋・局の名義

- 上古より近き昔も女の他行ふ必袋を持し事
 - ちりハ位高き女も自衣服を縫裁し事
 - 中昔宮女の淫弊・紫式部・清少納言が事
 - 婦女の心小覚抑えて益ふるべき事のくぐ
- ▲ 右者 後編の標目等の大方をあらを檢證の古國も何れあり
 清書の時を説の増補ふよりて標目を更條脚の前後より
 あらめりあらめりた心小たのめをあらめり
- およそ著述をあらめり小五ツの富を得ざれば雄篇をあらめり上り学才富
 二の蔵書小富三の記憶小富四の青年小富五の閑静小富此五ツの中
 於て地のよた少く閑静を得るのみ塩米を問を以て此作あり
 より孤陋の著述管見の弁説をあらめり外謬最多るべし
- 玉人の玉を磨く随て磨バ随て先を出を著述の稿を換る五人の玉成

磨くか如く磨く稿稿を欠欠されば全澤全澤をささげ吾吾が此片瓦此片瓦の作作も稿稿一脱一脱
あくののら讀讀これ心心ゆるざる所所多多と續續きて後編後編を由書由書終終ん心心雨雨く且且
它它の著述著述もあれ疎漏疎漏の後後補補ひんと稿稿を換換て茲茲前編前編の筆筆を拭拭ふ

俗称 岩瀬涼仙 著

歴世女装考卷四 前編之部終

官許

弘化四年
丁未仲秋



和漢洋書籍出版發賣

三茶通寺町東弁番地
京都書林 福井源次郎

